

義江明子

(よしえあきこ)



略歴

一九四八年、大阪府生まれ。七九年、東京都立大学大学院人文科学研究科修士課程修了。帝京大学文学部助教授・教授を経て、現在、同大学名誉教授。文学博士。著書に、『日本古代の氏の構造』(吉川弘文館、一九八六年)、『日本古代の祭祀と女性』(同、一九九六年/第一二回女性史青山なを賞)。『日本古代系譜様式論』(同、二〇〇〇年)、『つくられた卑弥呼』(筑摩書房、二〇〇五年)、『古代王権論』(岩波書店、二〇一一年)ほか。

〈受賞のことば〉

六世紀末から八世紀後半まで、古代には八代六人の女帝がいました。同じ時期の男帝とほぼ相半ばする数ですが、彼女たちは、これまでは男帝から男帝への継承をつなぐための「中継ぎ」、あるいは男帝にはない特殊な宗教的能力をもつ「巫女」とみなされてきました。それに対して本書では、一九八〇年代以降めざましい進展をとげた王権史の成果と女性史の成果を総合し、新たな女帝像を示すことをめざしました。その結果、男女の長老が統率する古代社会の双系的構造を土台に、男の王と同様の課題を担って王権の確立にとり組んだ女の王の姿が見えてきたのです。

通説の見直しは、「中継ぎ論」「巫女論」の学説形成の背景を史学史的に問い直すことと、すでに使い古され手垢のついた史料を、史料批判の原点に立ち返って一つ一つ厳密に検討することで、可能になりました。氏の構造分析、系譜様式論、古代女性生活史と、私がかれまであれこれと考えてきたことの全てが、本書の構想を支えています。遠回りに外堀を埋めるところから女性史研究を始めて四〇年、その節目にこのような大きな賞をいただき、感謝の気持ちでいっぱいです。